



出産経験数
3人

諦めた方がいいわ
言っただけ聞かぬ奴ら
じゃないから

うええ...

オマエら
出産祭が
ハジまるゾ！

バカ
そんなすぐ
出てくるわけ

出産経験数
1人

アタイ聞いてない
帰っていいかな...

出産経験数
1人

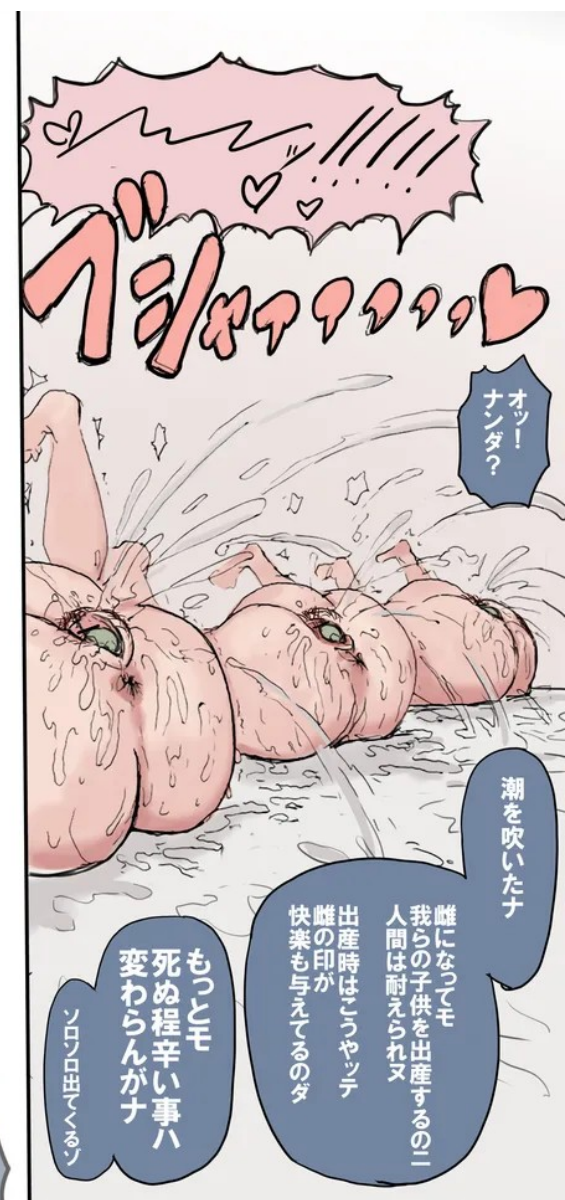
こんな大勢の前で
するの！？

これまで
色々あったけど
一番恥ずかしい

ウソ！















オーク出産祭2



オーク出産祭2

オークの祭りが始まる。
その名は「出産祭」



雌たちがオークの前で出産する祭り。



選ばれた雌たちは祭りの準備をしていた…







ずる.....♡

みんなの前へ
お尻を向けて...

...アソコを見せつける

うう...
こんなに大人数に
見られるなんて

エロい離の臭いだ

穴の奥まで
良く見えるぞ

良く実った尻だ
孕ませてえ

モ

ワ

ア

♡



うお！
何だ？！

お♡

お♡

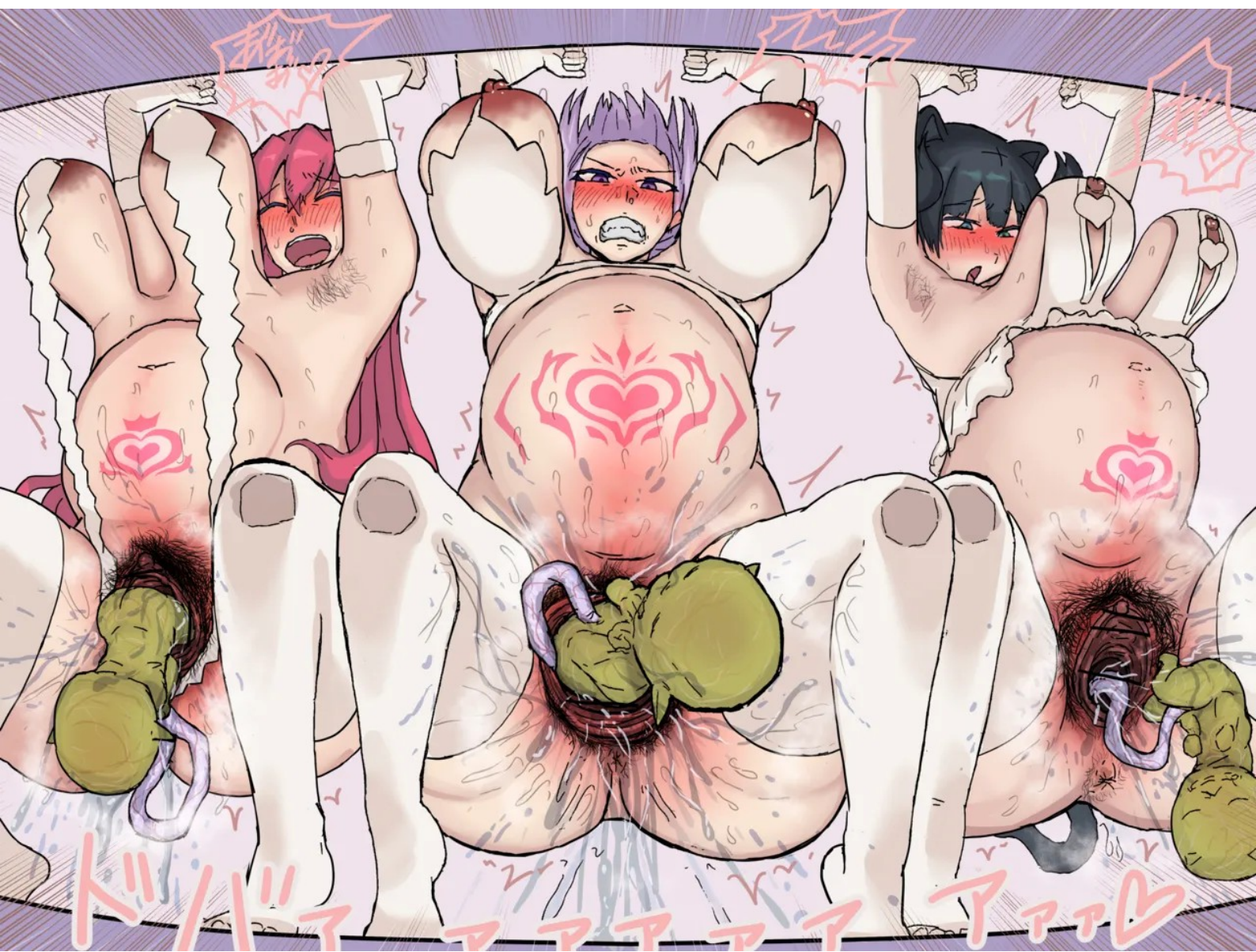
お♡

破水が始まったな

グニャッ♡









オーク出産祭3

3人の雌がステージの上に立つ。
その周りをオーク達が囲っていた。

アロマ
「まさか、お二人と
一緒にいれるなんて
幸せです。」

カンナ
「そんな事言うなよ、
雌はみんな平等だろ？」

マハリタ
「そうよ、だから敬語はなしよ。」

騎士団の副隊長と
有名な踊り子だった
二人がそう言った。

「そ、そうね。
ならはじめるよ、
オーク様。
私たちが未来の戦士達を
産む姿を見てください。」

こうして祭りが始まった。



「んんんんん!!!」

大人しそうな顔から
想像できない程、
苦悶の表情をした。



「ご覧ください、オーク様！」

はあ♡

はあ♡

はあ♡

苦しみと快楽の
混じった声でそう言った。
股を開き踊る彼女の股間に
緑の頭が覗かせていた。

「はあ、はあ、産まれちゃうー？
みんなに見られながら赤ちゃん産んじゃうー！」

ふるん

ふるん

じゃっ

じゃっ



「産まれる！」

じゅぶじゅぶと卑猥な音を立てた。
オークの赤ちゃんを出産した。
出産の苦しみから解放され、
荒い呼吸をする彼女。

「はぁ、はぁ、はぁ」

はぁ

はぁ

はぁ

はぁ

ぐじゅ

おぎんち

おぎんち

何度産んでもこの痛みはなれないなあ……
やり遂げた母親の顔であった。





彼女達は未来の戦士の命を生んだのだ。



こじ開けられた性器から伸びる
へその緒は彼女達が
この子の母親である事の確かな証拠だ。



3人はオークの子を出産した。

オーク達は彼女達に拍手を送り、
祭りは盛り上がった。

騎士団の副隊長
ただのシスター
有名な踊り子で裏組織の一味

3人が同じ舞台に立つ事など本来あり得なかった。
しかし、雌となった今は過去の地位など関係なかった。

オークにとって新しい生命を生み出す雌は
等しく素晴らしいのだった。

彼女達は雌の幸せに浸りながら
これからも産み続けるだろう...





4人のみんな顔が腫れ上がった。
オークたちが世界中から狩り集めた女騎士だったからだ。
彼女たちは生まれた地も肌の色も国籍も違っていた。
しかし今では一つの目的のために協力し、安らぎを求めている。
オークの巨身を持つという目的のため。

「なんでオレたちが
皆の胸で赤ちゃんを
産まないといけないんだ？」

「あー、
おんなのこ
産めるからさ」

「はあ、
おんなのこ産めるんだ」

「おんなのこ産める」

「おんなのこ産める
おんなのこ産める」

「あーもうわかった！
大股開いて産まなきゃいんだろー」



いくら時間が経ち：
大胆に広げた肉の洞窟の
奥から緑色の球体が顔を覗かせた。
「頭が出て来たぞ！」

「うるせえ！ちよつとは静かにしてろ！」
男勝りな性格は雌に堕ちても健在。

（死ぬほど痛てえ！
でも！オレが産まねえと……！
オレがアイツの為にできる一番大切な事なんだから……！）

傷が原因で婚約者から
逃げられた過去を持つ彼女。
結婚に憧れていたからこそ、
男を恨み、騎士としてひとり生きていく道を選んだはずだった。
そんな彼女が今では淫乱な肉体を持つ雌に変えられ、
大勢のオークに見られながら出産していた。



『……』
大きな悲鳴が会場内に響いた。

おおおお

『うふう……
痛い……
しんじやうよおお……』

頭が見えたぞ！
ほら、頑張れ！

ビクッ

（オーク様の声が聞こえる……
頑張らないと……！）

ビクッ

チリチリ

くじゅ

ビクッ

自由気ままな人生を送っていた彼女。
しかし、今では運命の人に巡り合い、
自分にしかできない大業を務めていた。
大勢の雄の前にさらけ出した秘部からは
赤ちゃんの顔が出ていた。

「あああああああ……」
「みて！みて！」
ソユル赤ちゃん産んでるよー！！

苦悶に満ちた顔で腰を振りながら
赤ちゃんを産んでいた。
その姿にオークたちも声を上げた。

ぐ
ぽ
ぽ

おっ♡

おっ♡

不安に満ちた騎士の時代からは想像が
付かない程、彼女は雌になっでしまっていた。
オークに愛されている安心と信頼から、
彼女は淫らな姿を晒していた。

フ
シュ
シュ♡

「もっといっぱいソユルが
赤ちゃんを産むところ見て♡」

フ
シュ♡

「ほら♡
もうこんなに赤ちゃん出てきてますよ♡」

フル♡

彼女の忠義は本物で今では心の底から主人のオークを愛し、
彼に身を捧げる事を考えている。
雌として出産祭で赤ちゃんを産む事が彼女の重要な務めなのだ。
そして、その時が来た。

彼女は痛みを見せず腰を振り赤ちゃんを揺らしていた。

彼女の一族は代々、領主を守る付き人を行っていた。
なので、小さい頃から、主人に尽くすための礼儀を教わっていた。
その教育がオークに対して向けられることになるとは
誰も想像していなかっただろう。

ビグッ

ビグッ

ッ

ブラッ

♡

「出ちゃいますっ！♡
赤ちゃん産まれますっ！」





「おっぱい、おいしいわね。ママの乳は、本当においしいわね。」

「はい、ママの乳は、本当においしいわね。」

「ママの乳は、本当においしいわね。ママの乳は、本当においしいわね。」

「ママの乳は、本当においしいわね。ママの乳は、本当においしいわね。」

「ママの乳は、本当においしいわね。ママの乳は、本当においしいわね。」

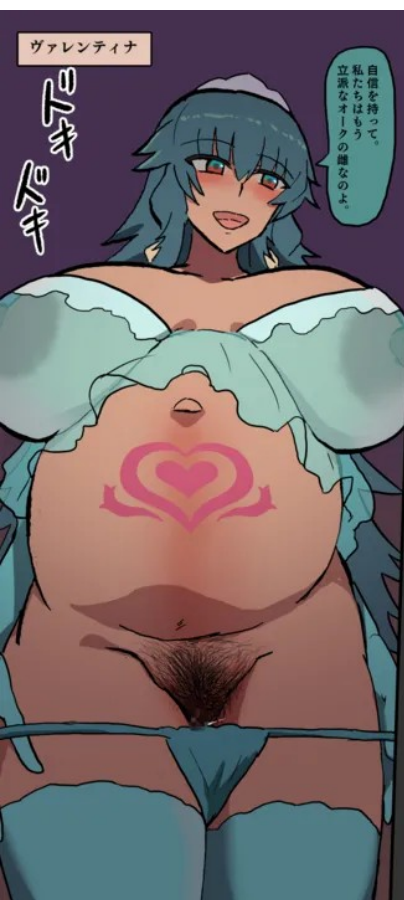
「ママの乳は、本当においしいわね。ママの乳は、本当においしいわね。」



出産祭
それはオークの進軍を祝う祭り。



様々な肌の色の雌達が
観客たちを興奮させた。





これから
赤ちゃんを
産みます♡

皆さん
見て下さい♡

数ヶ月前までは未使用で美しかった性器は
オークとの交尾で卑猥な形をしていた。

破水と共に観客の声援と太鼓の音が鳴った。
出産祭が始まった。







産まれるぞ!!

もうすぐ産まれるッ!



今後多くの女騎士が捕まり、雌に交えられていくだろう。
そしてその身体はオークのため使われていくのだった。

オークさま
ほんさい...♡

よくやった!!

こうして祭りは続いていくのだった。

新たな戦士の
誕生を祝い乾杯!!



魔界探索騎士隊は帰って来なかった



そこには3人の女性がいた。

「ちょっと！オリビアさんに近すぎじゃない??」

「いいんだよ、ボクとオリビアの仲だから」

「ここら喧嘩しないの。オーク様達の前なんだから。」

膨らんだお腹から彼女たちが妊娠なことは明らかだ。

そしてここは魔界にあるオークの国。

彼女たちはオークの雌で

そのお腹にはオークの赤ちゃんがいる。

彼女たちは誇り高き騎士であった。
しかしそれは人間の世界にいた時の話。
彼女たちの思考は今やオークの文化に染まっていた。
真ん中の女性がうっとりとした瞳で言った。

「オーク様。私たちが赤ちゃんを産むところよく見てくださいね」



「~~~~~っ!!」
声にならない悲鳴が何時間も続いていた。
最初は余裕あったが今ではただひたすら痛みに耐えていた。
オークの赤ちゃんを産むのに人間の身体は適していない。
この数か月間に彼女たちの体はオークの雌に相応しい身体に
改造されていた。しかし、それでも苦痛を味わう。

そして苦痛を中和させるように「雌の印」が快楽を与える。
これまで感じたことのない痛みと快感で彼女たちは
嗚咽のような、悲鳴のような何かを上げ続けていた。
彼女たちの股間から緑色の頭が見えてきた。
そろそろ産まれる様だ。



「あああああああああああ！！！！！！！！！！」

3人が同時に声をあげ
股の間から液体と緑の物体を吐き出した。



「ああ、みて…！
あなたと私の赤ちゃん…！
私幸せ…！」

「この子は天才になるよ、
なんたって
ボクの赤ちゃんなんだから」

「私に雌の喜びを
教えて下さり
有難うございます…！」



彼女たちは間違いなく騎士であった

才能で選ばれ
忠義で選ばれ
熱意で選ばれ

努力をし、才能を持ち、誇りを胸に抱き
魔物から民を守るため魔界へ向かったはずだった。

しかし、そこに騎士の面影はなく
慈愛に満ちた眼差して産まれたばかりの
わが子を見つめる母の姿だった。

彼女はこれからの人生全てをオークに愛され、
赤ちゃんを産み、育てる事になる。
騎士とは無縁の、雌の人生。

彼女たちの
騎士としての人生は
全て無駄だったのだろうか……？

